

荒魂之會來歴

昭和六十一年四月 荒魂之會

(活動略記)・夫々の年度に於ける新規活動事項	昭和五十年
例會活動開始（船橋市御嶽神社にて毎週第二 土曜の夜）	昭和五十年
昭和五十一年	昭和五十年
會報第五號・百部刊行（本號より一般配布、 年三回刊、順次部數を増加）	昭和五十年
あらたま創刊號・四十頁・參百部（以後年二 回刊、順次部數を増加、第二十一號は千部）	昭和五十年
○同人・十二名	昭和五十年
十二月 第一回連歌の會（→第十回）	昭和五十年
昭和五十二年	昭和五十年
十三月 同胞各位に訴へる（→その九）	昭和五十年
昭和五十三年	昭和五十年
會報第八號刊（本號より二百部）	昭和五十年
十二月	昭和五十年
昭和五十年	昭和五十年
十三月 會報第十一號刊（本號より二百五十部）	昭和五十年
一二月 講演會（→六回）	昭和五十年
少年讀本第一輯愛誦和歌發句撰の編修。	昭和五十年
昭和五十四年	昭和五十年
第三回連歌の會（本年度より正月に開催）	昭和五十年
會報第十四號刊（三百部、本號より年四回）	昭和五十年
贊助會員、百名に達す。	昭和五十年
少年讀本第一輯愛誦和歌發句撰、千部刊行。 (→第四刷、累計五千部)	昭和五十年
二十七日、愛誦和歌發句撰出版記念會（パレ	五月

スホテル

六月 愛誦和歌發句撰第二刷、千五百部刊行。

八月 第一回あらたま懇談會（→第十六回）

四月 会報第十八號刊（本號より三百五十部）

八月 荒魂之會名簿刊（以後、隔年四月に刊行）

○同人十五、贊助會員百二十四

愛誦和歌發句撰第三刷、千部刊行。

十二月 あらたま第十號刊（五十八頁、六百五十部）

二月 会報第二十二號刊（本號より四百部）

あらたま第十號合評並に第一回活動報告會

（山の上ホテル→第六回）

要望書・學校教育に於る望ましい漢字指導に

就て（文部省並に教育用漢字調査研究協力者
會議宛）

要望書・新紙幣發行による肖像畫の改廢に就
て（渡邊美智雄、大藏大臣宛）

少年讀本第二輯國語國史の常識、千五百部刊
行（→第三刷、累計四千五百部）

あらたま第十三號合評並に懇親の會（東京農
林年金會館、以後七月の會も都心にて開催）

國語國史の常識第二刷、千五百部刊行。

會場の都合により、例會日を以後第二日曜日
の午後に變更。

七月 少年讀本第三輯愛誦漢詩撰の編修開始。

昭和五十七年 一月 賛助會員、百五十名に達す。

少年讀本第二輯國語國史の常識、千五百部刊
行（→第三刷、累計四千五百部）

あらたま第十三號合評並に懇親の會（東京農
林年金會館、以後七月の會も都心にて開催）

國語國史の常識第二刷、千五百部刊行。

會場の都合により、例會日を以後第二日曜日
の午後に變更。

七月 少年讀本第三輯愛誦漢詩撰の編修開始。

昭和五十八年 一月 賛助會員、百五十名に達す。

少年讀本第二輯國語國史の常識、千五百部刊
行（→第三刷、累計四千五百部）

あらたま第十三號合評並に懇親の會（東京農
林年金會館、以後七月の會も都心にて開催）

昭和五十九年
二月 少年讀本第三輯愛誦漢詩撰、二千部刊行。

合計 百四十五回（打合會、幹事會は除く）

（例會テキスト冊數）
七十九冊（参考一）

八月 愛誦和歌發句撰第四刷、千五百部刊行。

十二月 あらたま十年記念第二十號刊行（百二十六頁
九百五十部）

東部公民館（船橋市）

昭和六十一年

◎四月十五日、同人下坂勝洋死去。

昭和六十二年

二月 會報第四十二號刊（本號より四百五十部）
四月 二十九日・あらたま刊行十周年記念懇親の會
(芝彌生會館)

國語國史の常識第三刷刊行（千五百部）

（會員） 昭和六十一年四月一日現在

同人

十三名

贊助會員

百八十八名

（刊行物）

○あらたま

○會報

○少年讀本

○同胞各位に訴へる

○總計

七十七點（増刷分六點）六萬四千八百五十部
(他に會員名簿と案内計五點、千百五十部)

（諸會合）

○研究會・八十四回 ○その他・六十一回

（講演會、懇談會）

○講演會・六回 ○懇談會・十六回

（外部への寄稿先數）

○論策・二十五 ○對談、講話、講演・十一

○研究發表・四 ○論文集その他・四 合計四十四

○（あらたま刊行物への諸家高評數）

○あらたま（一〇二十號）九十九名百四十五評

○あらたま第二十號への特別寄稿 十六名

○少年讀本（一〇三輯）五十三名六十六評

○同胞各位に訴へる（一〇九）への贊同者一覽

延百五十三名

（あらたまの反響）

○各種刊行物に於る、あらたま同人の活動の紹介

○記事轉載の刊行物數 十三

○紹介記事掲載の刊行物數 二十六

（會報讀書欄の紹介書目數）

○五四四冊

〈諸項目内容一覧〉

- 出版 ◎昭和五十一年度 五點 九百五十部
 會報第五號 、第七號、あらたま創刊號、第二號
 ◎昭和五十二年度 六點 千九百五十部
 會報第八號 、第十號、あらたま第三號、第四號、同胞各位に訴へる
 各位に訴へる
 ◎昭和五十三年度 六點 二千五百部
 會報第十一號 、第十三號、あらたま第五號、第六號、同胞各位に訴へる(その二)
 同胞各位に訴へる(その二)
 ◎昭和五十四年度 九點 六千九百部
 會報第十四號 、第十七號、あらたま第七號、第八號、愛誦和歌發句撰第一刷、愛誦漢詩撰第一刷、愛誦和歌發句撰第四刷、同胞各位に訴へる(その八)
 (他に會員名簿二百二十枚)
 ◎昭和六十年度 七點 七千四百部
 會報第三十八號 、第四十一號、あらたま第十九號、第二十號、同胞各位に訴へる(その九)
 ◎昭和六十一年度(四月迄) 三點 二千四百部
 會報第四十二號 、第四十三號、國語國史の常識第三刷
 (他に會員名簿二百三十枚)
 ◎昭和五十五年度 八點 六千七百部
 會報第十八號 、第二十一號、あらたま第九號、第十號
 愛誦和歌發句撰第三刷、同胞各位に訴へる(その四)
 (他に會員名簿二百枚、荒魂之會への案内三百枚)
 ◎昭和五十六年度 七點 七千百部
 會報第二十二號 、第二十五號、あらたま第十一號、第十二號、同胞各位に訴へる(その五)
 ◎昭和五十七年度 九點 九千八百五十部
 會報第二十六號 、第二十九號、あらたま第十二號、(増刷分)、第十三號、國語國史の常識第一刷第二刷、同胞各位に訴へる(その六)
 (他に會員名簿二百枚)
 ◎昭和五十八年度 八點 八千二百部
 會報第三十號 、第三十三號、あらたま第十四號、第十
 (他に會員名簿二百枚)

例會研究主題並に書名一覽
 ◎昭和五十一年度 二冊(十月、十一月)
 空拳と泥濘・草枕旅にしあれば(佐藤哲夫)
 ◎昭和五十一年度 四冊
 主題・萬葉集研究

- 新校萬葉集、日本語のこころ(渡部昇一) 肉食の思想
 (鯨田豊之) 閉された言語日本語の世界(鈴木孝夫)
 ◎昭和五十二年度 三冊
 主題・精神史としての日本文學史
 日本人の心の歴史上下(唐木順三) 死の日本文學史
 (村松剛)
 ◎昭和五十三年度 七冊
 主題・王朝文化の諸相
 平安朝の生活と文學(池田龜鑑) 世界と西歐(トイン)

ビイ) 往生要集(源信) 古今集、神道集、梅干と日本
(樋口清之) 讀岐典侍日記。六冊

◎昭和五十四年度

主題・小林秀雄研究
相鈴木貫太郎・戰後思潮の超克(小堀桂一郎) 小林
秀雄全集第一卷・第二卷・第七卷・第八卷・第九卷・
第十一卷・第十二卷 戰争は無くならない(松原正)

刀(樋口清之) 風姿花傳(世阿彌) 英語教育大論争(平泉涉・渡部昇
(國語教育の現状(太田行藏) 人間の建設(岡潔・
小林秀雄) 帝王後醍醐(村松剛) 南洲翁遺訓(参考と
して) 神道の成立(高取正男)

◎昭和五十五年度

主題一・三島由紀夫研究 主題二・日本の中世再論
デモ・シカ教師の獨斷と偏見(中尾太郎) 潮騒・文化
防衛論・憂國・春の雪(三島由紀夫) 狂言集、室町記
(山崎正和)

◎昭和五十六年度

七冊

主題一・小林秀雄著「本居宣長」通讀 主題二・三島
由紀夫著「豊饒の海」通讀 主題二・三島
豊饒の海二・三・四巻(三島由紀夫) 茶の間の正義・つかぬ
ことを言う(山本夏彦)

◎昭和五十七年度

七冊

主題一・小林秀雄著「本居宣長」通讀(續)
主題二・本居宣長通讀(續)
説明的文章の讀解指導(平山寛司) 文化なき文化
・教育とは何か・私の幸福論・私の國語教室・演劇入
門・人間この劇的なるもの(福田恒存)

◎昭和五十八年度

八冊

主題一・近世の諸人物 主題二・本居宣長通讀(續)
鎖國の思想(小堀桂一郎) 中朝事實(山鹿素行) 蘭學
事始(杉田玄白) おらんだ正月・近世人事物夜話・瓢箪
から駒・一代男新考(森銑三) 好色一代男(西鶴)

◎昭和五十九年度

十二冊

主題一・明治大正昭和三代詩歌を讀む 主題二・現代
著作家を讀む

◎昭和六十一年度

十二冊

主題一・柳田國男・折口信夫研究 主題二・現代著作
家を讀む(續)
小林秀雄(江藤淳) 賢作吾輩は猫である(内田百閒)
變化(吉田健一) 時代と私(田中美知太郎)

◎昭和五十九年

一回

諸會合の出席者延人數一覽
研究會二回 延二十二人(平均十一人)

その他

一回

九人

◎昭和五十一年度

二回

計三回 延三十一人

研究會二回 延六十一人(平均七・五人)

その他二回 延二十二人(平均十一人)

その他二回 延八十二人

計十回

その他二回 延二十二人(平均十一人)

計十回

◎ 昭和五十二年 研究會	七回	延五十一人（平均七・三人）
その他 研究會	五回	延五十二人（平均十・四人）
◎ 昭和五十三年 研究會	八回	延六十八人（平均八・五人）
その他 研究會	三回	延二十九人（平均九・七人）
◎ 昭和五十四年 研究會	八回	延九十人（平均十一・三人）
その他 研究會	十回	延百二十人（平均十二人）
◎ 昭和五十五年 研究會	八回	延八十人（平均十・六人）
その他 研究會	九回	延九十三人（平均十・三人）
◎ 昭和五十六年 研究會	八回	延八十三人（平均十・四人）
その他 研究會	八回	延八十四人（平均十九・六人）
◎ 昭和五十七年 研究會	八回	延一百七十八人（平均十一・九人）
その他 研究會	四回	延八十八人（平均二十・二人）
◎ 昭和五十八年 研究會	八回	延九十二人（平均十一・五人）
その他 研究會	八回	延九十四人（平均十七・八人）
◎ 昭和五十九年 研究會	八回	延一百四十二人（平均十七・八人）
その他 研究會	三回	延五百三十八人（平均十一・六人）
◎ 昭和六十一年 研究會	八回	延五百五十八人（平均十八・三人）
その他 研究會	六回	延九十一人（平均十一・三人）
◎ 昭和六十一年度 研究會	八回	延一百二十三人（平均二十一・五人）
その他 研究會	二回	延六十七人

その他 二回 延三十九人（平均十九・五人）
 (その他の會合とは、新年會合評會懇談會等を指す)

合計 研究會 八十四回 延八百六十九人

その他 六十一回 延九百十九人

講演會並に懇談會の講師一覽

講演會 六回 實施 (同人の勤務校で) 計四氏

樋口清之氏 (二回) 、村松嘉津女史、宇野精一氏、

石井勲氏 (二回)

懇談會 十六回 實施、計十四氏

佐々木奎文氏、石井勲氏 (二回) 太田行藏氏、岩下

保氏、樋口清之氏、中尾昭人氏、福田恆存氏 (二

回) 市原豊太氏、松原正氏 (二回) 宇野精一氏、新

田大作氏、木内信胤氏、小堀桂一郎氏

(佐々木、石井、太田、岩下、村松、福田、市原諸

氏は他の會合にも出席)

外部寄稿先一覽

◎ 論策 (定期刊行物)

（定期刊行物）

計二十五

授業研究、歴史と地理、學び方教室、世界思想、不二
 改革者、説話、教育新聞、月曜評論、國語國字、教育
 懇話、ことば、ボリシイ、中央公論、ふなばし朝日、
 鹿島だより、フオアマン、日本、國語教室、國語フォ
 ラム、教育の心、生政連ニュース、東書中學英語、
 教育創造、新勢力

馬渕和夫博士退官記念説話 文學論集、現代演劇協会機
 論文集その他
 關誌、櫻、宮下眞二遺稿集
 研究會
 昭和六十年度 (四月前半迄) 計四回
 その他 六十一年度 延九十一人 (平均二十一・五人)
 六回 延一百二十三人 (平均二十一・五人)
 六回 延六十七人

計四

◎第九號（四名）

椎野壽偉、小川雅照、寺嶋泰、臼井善隆

◎第十號（十五名）

西ヶ谷充良、針谷一衛、三瀧信吾、金城和彦、青山新

太郎、吉澤正晶、永野正夫、椎野壽偉、關正臣、藤田

士郎、鈴木由次、田口義昌、宇野精一、岩下保、橋本

忠次

◎研究發表（教科指導關係は除く） 計四
千教聯研修會、千葉教聯、日華交流教育會議、國語國字問題を考へる國民集會

あらたまへの高評諸家一覽（敬稱略、到著順）

◎創刊號（四名）

金坂信一郎、永野正夫、樋口清之、名越二荒之助

◎第二號（八名）

荒木精之、小谷惠造、鈴木由次、小柳陽太郎、北原重

登、鳥井衛、阿部正路、土屋道雄

◎第三號（三名）

坂本太郎、大石義雄、宇野精一

◎第四號（五名）

佐々木彰、三瀧信吾、今里隆次、鐸木俊三、高池勝彦

◎第五號（八名）

平泉雅緒、關正臣、岩下保、石義雄、西浦幸夫、寶邊

正久、竹内輝芳、新田大作

◎第六號（八名）

木村松治郎、江藤淳、早川幾忠、田邊萬平、太田行藏

小花和重三、藤田士郎、村松嘉津

◎第七號（三名）

野口恒樹、白井浩司、伊豆山善太郎

◎第八號（六名）

青山新太郎、木村松治郎、大石龜次郎、松原正、荒塚

◎第十一號（十一名）
岩下保、榎原繁雄、松原正、秋元正明、木村松治郎、大沼英太郎、村松嘉津、宮下眞二、中尾昭人、鐸木俊三、幡掛正浩

◎第十二號（十一名）

上田博和、藤井芳人、落合欽吾、新田大作、野口恒樹

小柳陽太郎、鈴木覺、竹内輝芳、高池勝彦、寶田正道

前川孝志

◎第十三號（五名）

三浦つとむ、工藤重忠、平田宗隆、照屋佳男、倉野憲

司坂本太郎、竹内輝芳、名越二荒之助、稻川誠一、鈴木

正次、野口武司

◎第十四號（六名）

坂本太郎、竹内輝芳、名越二荒之助、稻川誠一、鈴木

正次、野口武司

◎第十五號（六名）

松原正、松田福松、太田行藏、木村松治郎、落合欽吾

照屋佳男

◎第十六號（九名）

關根文之助、石井一朝、倉野憲司、佐藤孝志、石井勲

宇野精一、白井傳、長谷川三千子、山下覺辯

◎第十七號（四名）

山内健生、杉田幸三、小林信夫、小堀桂一郎

◎第十八號（十四名）

佐藤通次、岩下保、森本忠、大石龜次郎、小見山登、落合欽吾、倉野憲司、小堀桂一郎、内村剛介、照屋佳男、中村粲、鈴木覺、原田種成、宇野精一

◎第十九號（六名）

居關正二郎、萩野棟省、寶邊正久、小見山登、若井勲

夫、伊波隆

◎第二十號（九名）

宇野精一、平山三郎、佐々木秀信、坂本太郎、渡邊茂

小見山登、照屋佳男、金城和彦、山本宏

以上 九十九人百四十五

あらたま第二十號への特別寄稿諸家一覽

（敬稱略、十六名）

岩下保、野口恒樹、照屋佳男、鐸木俊三、淺野晃、竹内輝芳、佐々木奎文、倉野憲司、村尾次郎、落合欽吾
村松嘉津、大沼英太郎、今里隆次、新田大作、中村信一郎、小堀桂一郎

少年讀本への高評諸家一覽（敬稱略）

（三十五名）

◎第一輯愛誦和歌發句撰（敬稱略、十六名）

樋口清之、小池榮壽、名越二荒之助、上田博和、岩下保、木村松治郎、淺野晃、石井勲、新田大作、古谷進
關正臣、臼田甚五郎、若井勲夫、河田悌三郎、平泉雅維、伊藤三千代、佐々木奎文、小堀桂一郎、村松嘉津
中尾昭人、村尾次郎、平山寛司、鐸木俊三、所功、寶邊正久、山田貞藏、大平千枝子、矢富巖夫、木ノ下白
鳥井衛、田口義昌、荒木精之、齋藤貞幸、阿部

正路、市原豊太

◎第二輯國語國史の常識（十五名）

淺野晃、小堀桂一郎、太田青丘、大石龜次郎、野口恒樹、宮下眞二、林巨樹、福田恆存、寶邊正久、佐藤茂
佐々木奎文、青山新太郎、副島爽子、青木廣子、關正臣、村松嘉津

◎第三輯愛誦漢詩撰（十六名）

倉野憲司、中尾昭人、野口恒樹、川口久雄、山田貞藏
大石龜次郎、小見山登、照屋佳男、鐸木俊三、小島憲之、三浦信吾、白井善隆、寶邊正久、松村洋史、關正臣、村松嘉津

「同胞各位に訴へる」への賛同者一覽（敬稱略）

◎「日中漢字の略字共通化」なる國語破壊の策謀の阻止に就て（昭和五十二年十月）

石義雄、藤井純一、森田金次、鈴木寛、佐々木奎文、西浦幸夫、鐸木俊三、關正臣、菖蒲榮光、佐々木彰、服部博次、小堀桂一郎、秋元正明、溝口健也、岩下保
三浦信吾、保田與重郎、神守夫、伊藤喜民、幡掛正浩
小花和重三、今里隆次、大石龜次郎、木ノ下甫、平泉雅緒、木本嚴生

◎國語表記の正則に就ての提言（昭和五十三年十月）

大石龜次郎、關正臣、上田賢治、高橋義孝、上田博和
小柳陽太郎、今里隆次、田口義昌、上西左大信、新田大作、佐藤茂、矢富巖、佐々木奎文、青山新太郎、齋藤貞幸、野口恒樹、山田貞藏、淺川肇、平田宗隆、佐々木秀信、若井勲夫、白井傳、白濱裕、鎌田一步、早川幾忠、中尾昭人、鈴木昌鑑、中島哲平、加藤三之輔
（二十九名）

- ◎漢字制限撤廃に就ての提言 昭和五十四年十月
 白井武夫、榎原繁雄、石田明、木村松次郎、大石龜次
 郎、景山直治、小川雅照、神山吉雄、宇野精一、三浦
 信吾、中島哲平、鈴木多喜男、小柳陽太郎、落合欽吾
 關正臣、若井勲夫、河戸博詞、小堀邦夫、萩野棟省、
 崔野壽偉、迫和宏、寺嶋泰、荒塚國男、白井傳、角田
 文衛、大森覺道、新田大作、寶邊正久、太田青丘、上
 西左大信、佐々木奎文、吉澤正晶、小西保、弘瀬清一
 郎、久坂總三
- (三十五名)
- ◎郵便物等の宛名表記を正すことに就ての提言 昭和
 五十五年九月
 太田行藏、佐野茂、有賀清之助、上田博和、中島哲平
 木村松次郎、金城和彦、小堀桂一郎、太田青丘、大石
 龜次郎、佐々木奎文、小柳陽太郎、萩野棟省、鈴木多
 喜男、太田正弘
- (十六名)
- ◎文の姿を保つ事に就ての提言 昭和五十六年九月
 野口恒樹、大沼英太郎、村松嘉津、保坂弘司、上田博
 和、中津海茂、中尾昭人、藤澤一雄、山内健生、藤井芳人、青木廣子、久保治
- (十二名)
- ◎國語審議會の假名遣審議に關する提言 昭和五十七
 年十月
- 有賀清之助、新田大作、佐々木奎文、寺田清一、杉田
 幸三、大沼英太郎、石井欣之助、鈴木恒男、畔上知時
 神尾式春、中尾昭人、江面静彦、上田博和（十三名）
- ◎文化防衛の根幹に關する提言 昭和五十八年十月
 有賀清之助、上田博和、小堀桂一郎、淺川肇、中島哲
 平、照屋佳男、若井勲夫、山本宏、中尾昭人（九名）
- ◎國語表記の多様性と統一性に關する提言 昭和五
 十九年十月

あらたまの反響

- ◎あらたま並に同人の論策への言及の記事掲載
 サンケイ新聞、新勢力、不二、神社新報、經濟論壇、
 人生隨順、代々木、一步園、歴史と人物、文明時評、
 ジャッジアンドアピール、ラジオ日本、師と友、改革
 者、大學漢文教育研究年會報、祖國と青年、諸君！、
 正論、紫の雲、自然隨順、動向、文化會議、月曜評論
 活性、日本の教育、総合教育技術 計二十六
- ◎同人の論策並に同胞各位に訴へるの轉載
 時の課題、やまと新聞、國民新聞、道の友、マスコミ
 文化、一步園、日本の教育、文明事評、高校と教育、
 大阪の教師、東海文化新聞、新聞展望、ゼンボウ
 計十三

- 會報讀書欄の書物一覽 五十四冊
 省略の文學（外山滋比古）神話からの贈物・知的生活
 の方法（渡部昇一）櫻と劍（村上兵衛）志（小林茂）
 なぜ日本語を破壊するのか（福田恆存他）大和の海原
 （樋口清之）イソップ寓話（小堀桂一郎）ことばの人
 間學（鈴木孝夫）日佛の間に在りて（村松嘉津）續い
 のちささげて・言の林正續（佐藤通次）素晴しき國日
 本（渡邊正廣）プロヴァンス隨筆（村松嘉津）教育の

- 村松嘉津、若井勲夫、有賀清之助、小林信夫、新田大
 作、大森覺道、岡本幸治、乘松義雄、野田英二郎、齋
 藤礎雄
- ◎國語破壊の是正に關する提言 昭和六十年十月
 上田博和、乘松義雄、有賀清之助
- (十名)
- 延百五十三名

再生（野口恒樹）大人のしつけ紳士のやせがまん（高橋義孝）森鷗外文業解題創作篇・森鷗外文業解題翻譯篇・宰相鈴木賀太郎（小堀桂一郎）道義不在の時代（松原正）戦後教育の中で（小柳陽太郎）内的風景派（市原豊太）原理日本の信と學術（木村松治郎編）敗戦参謀奮闘記（山内一臣）日本經濟の秘密（木内信胤）ものぐさ手帖（淺野晃）祖國復興（三浦信吾）世纪の寶庫日本（名越二荒之助）嗚呼冲縄戦の學徒隊（金城和彦）暖簾に腕押し（松原正）日本人の宗教心（安津素彦）民俗文學へのいざなひ（臼田甚五郎）東京裁判とは何か（田中正明）學習指導要領をどう見直したらよいか（稻川誠一）教育基本法の問題點（上杉千人）これが正しい小中學校教科書だ（小堀桂一郎）編）米英思想研究抄（松田福松）日本史新論（保田與重郎）金属と人間の歴史（桶谷繁雄）儒教思想（宇野精一）オイデアス王アンティゴネ（福田恒存譯）平安朝の漢文學（川口久雄）史書を讀む（坂本太郎）三韓（中忠夫）君し旅ゆく（坊城俊民）歌人今上天増補版（夜久正雄）親子で讀める天皇日本史・エピソードで綴る天皇さま（杉田幸三）今上天皇の六十年（小堀桂一郎）天皇御巡幸（世界日報社編）

あらたま第二十一號内容一覽

昭和六十一年四月・荒魂之會

總特輯・明治大正昭和三代詩歌案内
案内 新體詩・新しい詩風のうねり
語定型詩・口語自由詩の流れ
翻譯詩・文

和俳句・季節感と古典の姿とを傳へる
歌・断えることなき敷島の道

漢詩・文明開化の諸人物の精神的骨格
歌・文明開化の新事物を積極的に把握
唱和歌（四十首）
和歌句（四十句）
俳句（十首）

漢詩
新體詩（五十篇）

唱和歌（二十五篇）

五十音順詩歌名一覽（百六十五篇）
討論・「わが愛する詩人の傳記」をめぐつて

詩歌集案内・文庫新書收録の二十七冊と複刻版詩歌集
三代詩歌集略年表
資料その他

荒魂之會來歴
(あらたま刊行十周年記念懇親會を機に作製)
編輯・發行
荒魂之會

(昭和六十一年五月二十日訂正版)

昭和六十一年六月中旬刊 八十八頁 千部
額價・四百五十圓 送料・二百圓
振替口座 東京〇一三九〇七八 荒魂之會

荒魂之會來歴・續

平成三年五月

(活動内容) 例會 每月一回第二日曜日(一月は新年連歌の會、八月は休會)。

(活動略記) 夫々の年度に於る新規事項、若しくは継

続事項の初回。

◇昭和六十一年(五月以降)

五 月 第十七回あらたま懇談會(第十九回)あらたま第二十一號刊行(本號より千部)會報第四十四號刊行(四百五十部)同胞各位に訴へる。その十(十二回)第一回あらたま關西懇談會(名古屋市、二回)

六 月 同

◇昭和六十三年二月 會報第五十號卷頭に、「昭和六十三年聖上米壽の賀を壽ぎ奉る」といふ賀詞を掲載す。三日・福田恒存全集完結記念並に福田恒存先生喜壽の賀祝賀會。(芝彌生會館)別冊あらたま其の一・正統表記の實踐、二百部刊行。

七 月 同

荒魂之會名簿刊行(從來の隔年四月刊を七月刊に改む)。

○同人十二名、贊助會員二百七名。

十二月 同

少年讀本第四輯愛誦文章撰、二千部刊(御在位六十周年奉祝出版。題字・村松嘉津女史)

題を考へる國民集會の開催(二月、七月、十一月の三回)に當つて、企劃運營に加はつた。

◇昭和六十二年二月 第七回活動報告會(以後、中止)贊助會員、二百一名に達す。

七月 同

十一月 同

◎國語國字問題を考へる有志の會主催の國語國字問題を考へる國民集會の開催(一泊二日)

十二月 同

一月 ◇昭和六十四年平成元年

深川周邊史蹟散策並に先帝陛下の御遺徳を偲び奉る會(當初の豫定では、深川周邊の史蹟散策の後で第十三回連歌の會を行ふものであつたが、一月七日先帝陛下崩御に鑑み、連歌

例會に於て唱歌村祭を齊唱す。(以後定例、但し、一月には一月一日、二月には紀元節、四月には天長節、十一月には明治節と定む)

◎國語國字問題を考へる有志の會主催の第四回國語國字問題を考へる國民集會の開催(十二月)に當つて、企劃運營に加はつた。又、國語國字問題を考へる有志の會の國語國字問題資料第一冊の刊行(七月刊、B五判二十四頁)に當つて、編輯に加はつた。

二月

の會を改める。會の冒頭に於て先帝陛下の御神靈に默禱を捧げ、恒例の唱歌一月一日は中止。尚、新年の史蹟散策は以後定例にす。) 會報第五十四號卷頭に、「謹みて昭和の御世を送り平成の御世を迎へ奉る」といふ章句を掲載す。

○例會の唱歌は二月二十四日の御大葬に鑑み紀元節を海ゆかばに改む。二月二十四日の御大葬當日には皇居前並に新宿邊に各自參集して、御見送り奉つた。

第十三回連歌の會。唱歌天長節は花に改む。會報第五十五號卷頭に、「奉祝大日本帝國憲法發布百周年」の章句を掲載す。

調査・定期刊行物に於る年表示の實態、三頁七百五十部刊行。

別冊あらたま其の二・夜麻登志宇流波斯(先帝陛下奉悼文集。題字・落合欽吾氏)、三百部刊行。

世田谷史蹟散策(靖國神社遊就館に於て、昭和天皇の御敬神を偲ぶ特別展を拜觀)。

會報第五十七號に、物故七先生の紙碑を掲載。

少年讀本第五輯言葉盡しの編修の分擔をす。

例會の唱歌天長節(二十三日が天長の佳節)は先帝陛下の諒闇中につき、螢の光に改む。

贊助會員宛の年末の挨拶状に、先帝陛下の諒闇中につき、平成二年年頭の御挨拶は遠慮申上げたき旨を記す。

◎同人小川雅照、豊源太の筆名にて、「國語の復權」を上梓す。

(八月、洛風書房刊)

四月
同
十一月
同
十二月
同

七月
同
十月
同
十一月
同

七月
同
十月
同
十一月
同

◇平成二年(皇紀二千六百五十年)
一月
二十八日、第十四回新年連歌の會。諒闇は明けぬ。唱歌一月一日を歌ひ、會場(向島、百花園)の床の間には柿本人麻呂像を掲げた。(以後定例とす)白瀬中尉南極探検記念碑を訪ね、隅田川周邊の地を巡つた。(史蹟散策は本年中に七回實施)

會報第五十八號刊行。卷頭に、「奉祝・皇紀二千六百五十年並に今上陛下御即位の御大典」といふ章句を掲げた。又、新刊紹介欄に先帝陛下の御遺著「皇居の植物」を謹載。

十一日・少年讀本第五輯言葉盡し第一回編修會。(→第十二回)

會報第五十九號刊行。「石井勳先生の菊池寛賞受賞に寄せて」(荒井眞弓)を掲載。又、卷頭に、「平成二年・日露戰爭勝利八十五周年三月十日奉天大會戰五月二十七日日本海海戰」の章句を掲載。

調査・新聞に於る年表示と表記との實態、四頁、九百部刊行。

あらたま第二十九號刊行(五十四頁、千部)背表紙に、皇紀二千六百五十年の表示を記載。

會報第六十一號刊行。讀書欄に、「皇室傳統を語る五冊と先帝御製集と」を掲載。

少年讀本第五輯言葉盡し、二千五百部刊行。(皇紀二千六百五十年並に今上陛下御即位の御大典奉祝出版。題字・福田恆存氏)

◎少年讀本全五輯の累計、一万六千部。

十一日（日）例會。國旗を掲げ、國歌並に明治節を齊唱。十二日（月）御大典。皇居前廣場に參集。十七日（土）奉祝提燈行列。皇居前廣場に參集。十八日（日）一般參賀。

○少年讀本
○別冊あらたま
○同胞各位に訴へる

十二月
○あらたま十五年記念第三十號刊行。（百二十六頁、千部）

十六日（日）例會。唱歌天長節並に平成の御代をたたえんを齊唱。

◇平成三年（皇紀二千六百五十一年）一月
二十日（日）谷中、根津、千駄木、根岸の史蹟散策並に第十五回新年連歌の會（會場・笹乃雪）唱歌一月一日並に平成の御代をたたえんを齊唱。

二月
○會報第六十二號刊行。「同人回顧・あらたま十五年」（十二人）を掲載。

三月
○會報第六十三號刊行。連歌の會十五回の詠草並に少年讀本第五輯言葉盡し諸家高評（十六人）を掲載。

四月
○別冊あらたま其の三・かりがね集刊行。（三十六頁、三百部。題字・平山寛司氏）

五月
○荒魂之會來歴・續ヘ私家版刊行。（八頁、六十部）

六月
○十二日（日）例會終了後、物故者慰靈祭を行。（御嶽神社に參拜、祭典は中臺町會館）

（會員）
○あらたま
○平成三年五月一日現在 同人 十四名
○（刊行物）
○あらたま
○贊助會員 百九十五名
○十點（二十一～三十號）

- 懇談會・三回 ○祝賀會・一回
○（外部への寄稿先數）
○論策・十六 ○研究發表他・三 合計十九
○（あらたま刊行物への諸家高評數）
○あらたま（第二十一～第三十號）五十二人六十一評
○あらたま諸號の質問に對する諸家回答數
○二十四號・二十六號・二十八號 四十七人五十三回答
○少年讀本（四輯五輯）二十八人三十一評
○同胞各位に訴へる（十～十二）への贊同者數
○（あらたまの反響） 延十九名
○各種刊行物に於る、あらたま並に同人の活動の紹介
○紹介記事掲載の刊行物數
○記事轉載の刊行物數
○（會報讀書欄の紹介書目數）

- 六十四冊　〔會報卷頭記事〕（今回より掲載）
- 五十七篇（第七號より掲載、第六十三號迄）
へ諸項目内容一覽△
- 出版
- 昭和六十一年度（五月以降）六點　八千九百部
會報第四十四號（第四十五號、あらたま第二十一號、第二十二號、同胞各位に訴へる（その十）、少年讀本第四輯愛誦文章撰）
- 昭和六十一年度（五月以降）六點　五千八百部
會報第四十六號（第四十九號、あらたま第二十三號、第二十四號、同胞各位に訴へる（その十一））
- 昭和六十三年度（五月以降）八點　六千部
會報第五十號（第五十三號、あらたま第二十五號、第二十六號、同胞各位に訴へる（その十二）、別冊あらたま其の一・正統表記の實踐（他に會員名簿二百五十部））
- 昭和六十四年平成元年度（五月以降）八點　四千八百五十部
會報第五十四號（第五十七號、あらたま第二十七號、第二十八號、調査・定期刊行物に於る年表示の實態、別冊あらたま其の二・夜麻登志宇流波斯（先帝陛下奉悼文集））
- 昭和六十四年平成元年度（五月以降）八點　七千二百部
會報第五十八號（第六十一號、あらたま第二十九號、第三十號、調査・新聞に於る年表示と表記との實態、少年讀本第五輯言葉盡し（他に會員名簿二百五十部））
- 平成三年度（五月迄）三點　千二百部
會報第六十二號（第六十三號、別冊あらたま其の三・かりがね集（諸家高評集））

例會研究主題並に書名一覽

- 昭和六十一年度（五月以降）九冊
○五十七篇（第七號より掲載、第六十三號迄）
へ諸項目内容一覽△

折口信夫全集第一卷、先祖の話（柳田國男）木綿以前の事（柳田國男）折口信夫全集第七卷、妹の力（柳田國男）折口信夫全集第三卷、海上の道（柳田國男）遠野物語（柳田國男）折口信夫全集第二十三卷

- 昭和六十二年度（五月以降）十二冊

主題一・日本浪漫派研究　主題二・福田恒存全集を讀む

保田與重郎全集第四卷、福田恒存全集第一卷、保田與重郎全集第十卷、天の夕顔（中河與一）福田恒存全集第二卷、定本淺野晃全詩集、伊東靜雄詩集、福田恒存全集第三卷、日本史新論（保田與重郎）田園の憂鬱（佐藤春夫）福田恒存全集第四卷、我が萬葉集（保田與重郎）

- 昭和六十三年度（五月以降）十冊

主題一・近世典籍を讀む　主題二・福田恒存全集を讀む（繼續）

近世崎人傳（伴蒿蹊）福田恒存全集第五卷、五輪の書（宮本武蔵）奥の細道（松尾芭蕉）福田恒存全集第六卷、西洋紀聞（新井白石）雨月物語（上田秋成）海國兵談（林子平）日本外史（賴山陽）初山踏（本居宣長）

- 昭和六十四年平成元年度（五月以降）十點十四冊

主題一・幕末維新の人々　主題二・福田恒存全集を讀む（繼續）

南洲翁遺訓、一外交官の見た明治維新（サトウ）福田

恒存全集第七卷、氷川清話（勝海舟）長崎海軍傳習所の日々（カツテンディケ）橋曙覽歌集、福田恒存全集第八卷、啓發錄（橋本左内）日本浮虜實記（ゴロウニン）講孟箇記（吉田松陰）

◎平成二年十月

主題一・小林秀雄保田與重郎研究 主題二・少年讀本

第五輯の編修

保田與重郎全集第五卷、保田與重郎全集第八卷、本居宣長補記（小林秀雄）保田與重郎全集第十五卷、保田與重郎全集第二十七卷、保田與重郎全集第十七卷、白鳥・宣長・言葉（小林秀雄）浪漫派變轉（淺野晃）

田與重郎全集第三十二卷、保田與重郎全集第三十六卷

◎平成三年度（四月迄）三冊

主題・明治諸人物研究

東洋の理想（岡倉天心）代表的日本人（内村鑑三）日本開化小史（田口卯吉）

◎諸會合の出席者延人數一覽

◎昭和六十一年度（四月後半以降）

研究會 六回 計十一回 延百九十二人

その他 五回 延六十九人（平均十一・五人）

研究會 八回 延百二十三人（平均二十四・六人）

その他 四回 延九十三人（平均二十三・三人）

◎昭和六十二年度 計十二回 延百八十三人

研究會 八回 延九十人（平均十一・三人）

その他 八回 計十五回 延二百十八人

研究會 十回 延百五人（平均十・五人）

その他 五回 延百十三人（平均二十二・六人）

◎昭和六十四年平成元年 計十七回 延二百五人

研究會 十回 延百十九人（平均十一・九人）
その他 七回 延八十六人（平均十二・三人）

◎平成二年 十回 計三十四回 延二百八十一人
研究會 十回 延百三人（平均十・三人）

その他 二十四回 延百七八八人（平均七・四人）

◎平成三年度（四月迄）計八回
研究會 三回 延二十七人（平均九人）

その他 五回 延五十二人（平均十・四人）
(その他の會合とは、新年會合評會懇談會等を指す)

合計 九十七回 延千百五十八人
研究會 四十七回 延五百十三人

その他 五十回 延六百四十五人

(回數では九十七回であるが、研究會に續いて合評會を行ふやうな例を勘案すれば、日數では八十一日である。この中には鎌倉に於る宿泊一が含まれる。)

懇談會、祝賀會の講師客人一覽

懇談會 三回 實施 計三氏

阿部正路氏、落合欽吾氏、福田恒存氏（落合氏は他の會合にも出席）

祝賀會 一回 實施

福田恒存氏（福田恒存全集完結記念並に福田恒存先生喜壽の賀祝賀會）

外部寄稿先一覽

◎論策（定期刊行物）

改革者、營業情報、月曜評論、リーダー、不二、國民新聞、神道學、教育正論、道の友、國學院雜誌、日本教育、神社新報、日本、赤門合氣道、古書通信、葛

計十六（三十七篇）

○研究發表、他
日華教育研究會、國語國字問題を考へる國民集會、中京テレビ
計三（八回延十二人）

あらたまへの高評諸家一覽（敬稱略、到著順）

○第二十一號・總特輯明治大正昭和三代詩歌案内（十名）

中河與一、中尾昭人、鈴木恆男、粉川宏、野口恒樹、
倉野憲司、小田村寅二郎、河田悌三郎、照屋佳男、中
村粲

○第二十二號・總特輯現代著作家案内（八名）

矢野健太郎、日比義也、大谷豪見、小林道徳、竹内俊
隆、小田村四郎、岡田則夫、粉川宏

○第二十三號・總特輯柳田國男折口信夫小論（四名）

阿部正路、中河與一、小柳陽太郎、所功

○第二十四號・總特輯日本國辭書批判（六名）

小堀杏奴、中村保男、倉野憲司、松田福松、柏谷嘉弘
今野宏

○第二十五號・總特輯日本浪漫派小論（五名）

中河與一、幡掛正浩、長岡千尋、柏谷嘉弘、奥西保
○第二十六號・總特輯日本國教科書批判再論（八名）

小見山登、中澤伸弘、佐々木彰、太田稔、金子善光、
吉田良次、仙北谷晃一、石川洋子

○第二十七號・總特輯近世の諸人物（八名）

森洋、小見山登、鐸木俊三、村尾次郎、森田康之助、
井上順理、市川靜夫、石井欣之助
○第二十八號・總特輯近世の學舍（四名）

落合欽吾、山田輝彦、吉澤正晶、富士信夫

あらたま諸号の質問に對する回答諸家一覽（敬稱略、到著順）

○第二十四號・辭書に關する質問への回答

所功、小林道徳、工藤重忠、橋本忠次、宇野精一、福
田逸、竹内輝芳、白井傳、粉川宏、若井勲夫（十名）

○第二十六號・教科書に關する質問への回答

田中正明、岩下保、三瀧信吾、名越二荒之助、粉川宏
倉野憲司、宇野精一、木南卓一、居關正二郎、照屋佳
男、杉田幸三、山口康助、白濱裕、石井勲、青木廣子

平山寛司、高池勝彦

○第二十八號・近世の學舎に關する質問への回答

中河與一、川口久雄、加地伸行、小出昌洋、金子善光
山内健生、若井勲夫、角山素天、遠山和夫（九名）

○第三十號・國史の諸人物に關する質問への回答

村尾次郎、小田村寅二郎、山田輝彦、橋本忠次、松田
福松、小見山登、關正臣、岡本幸治、上田三三生、森

田康之助、幡掛正浩、三瀧信吾、山本宏、小田村四郎
小谷幸雄、市川靜夫、平山寛司

（十七名）

○第二十九號・總特輯幕末維新の諸人物小論（三名）
辻森秀英、今野宏、白井傳

○第三十號・總特輯國語と國史と國體と（五名）
林三郎、山口宗之、横地末次郎、仙北谷晃一、所功

（敬稱略、到著順）

○第四號・愛誦文章撰

中河與一、大石龜次郎、倉野憲司、名越二荒之助、照
屋佳男、朝比奈正幸、鐸木俊三、石井勲、竹内輝芳、
落合欽吾、橋本眞知子、關正臣、安齋隆、高池勝彦、

粉川宏

◎第五輯言葉盡し

白井傳、橋本忠次、上田三三生、原田種成、宇野精一
照屋佳男、平山三郎、山田輝彦、日比義也、阿部正路
筈目善一郎、粉川宏、北村倫子、三浦信吾、萩野貞樹
高池勝彦

(十六名)

「同胞各位に訴へる」への賛同者一覽（敬稱略、到著順）

その十・國語國字問題の新たなる危機に關する提言
「現代假名遣い」並に國語表記の機械處理に就て

角山素天、小林信夫、鈴木恆男、有賀清之助、小田村
四郎

(五名)

◎その十一・國語審議會の責務に關する提言－社會一般の面目を保つ爲に

(昭和六十二年十月十八日(日))

有賀清之助、佐々木奎文、角田文衛、白崎秀雄、加地
伸行、人魚同人會高岡

(六名)

◎その十二・外來語の濫用とその要因とに就て

(昭和六十三年十月二日(日))

渡邊茂、小見山登、關正臣、杵岡正浩、椎野壽偉、中
澤伸弘、森洋、匿名

(八名)

◎あらたまに同人の論策への言及の記事掲載
楠葉だより、日本の教育、波、教育正論、青森毎日
伊丹師友、青森毎日

計五(七回)

(十五名)

會報讀書欄の書物一覽

六十四冊

首丘の人太西郷（平泉澄）月夜車（森銑三）自衛隊よ
胸を張れ（松原正）言靈の幸ふ國（市原豊太）武器と
してのことば（鈴木孝夫）ことばの意味とところ（石
井勲）明治と昭和（村松嘉津）國定教科書（粉川宏）
日本憲法要論（三浦信吾）ジョージ・オーエル（照屋
佳男）福田恒存全集全八卷、リチャード二世（福田恒
存譯）日本歴史の特性（坂本太郎）傳統意識の美學
(村尾次郎)日本の祝祭日（所功）天の夕顔前後（中
河與一）漱石邸幻想（阿部正路）凸型西洋文化の死角
(岡本幸治)隨聞・日本浪漫派（淺野晃・檜山三郎）
世界に生きる日本の心（名越二荒之助）スター・リン獄
の日本人（内村剛介）王朝漢詩選（小島憲之編）漱石
世界と枕繪（川口久雄）京の朝晴れ（角田文衛）今
上天皇論（小堀桂一郎）逆日本史全四卷（樋口清之）
二葉亭四迷と明治日本（桶谷秀昭）戦後世代からの發
言（國民文化研究會）ことばの社會學（鈴木孝夫）名
譯と誤譯（中村保男）日本語の再發見（石井勲）日本
文學における漢語表現（小島憲之）現代川柳のサムシ
ング（今野空白）範例による文章表現（萩野貞樹）私
の見た東京裁判（富士信夫）アジアに生きる大東亞戰
爭（アセアンセンター編）やまと心—日本の精神史
(森田康之助)愛戀無限（中河與一）岡倉天心論攷
(浅野晃)狐物語の世界（原野昇・鈴木覺・福本直
之）斷然缺席（阿川弘之）福田恒存と戰後の時代（土
屋道雄）近代主義を超えて（小林道憲）物いふ小箱・
びいどろ障子・史傳閑歩・傳記文學初雁（森銑三）漢
字小百科辭典（原田種成編）聖帝昭和天皇をあおぐ
(日本を守る國民會議編)天皇とその時代（江藤淳）

昭和天皇論・續（小堀桂一郎）歴代天皇の帝王學（杉田幸三）天皇－その論の變遷と皇室制度（大原康男）昭和天皇の御製（眞世界運動本部編）

會報卷頭記事一覽

○第七號より掲載。第八號より第二十三號迄は題名中に「文化」の語を用ゐ、第二十四號以降は卷頭記事欄の名稱として「我が文化防衛」の語を用ゐる。僥倖、獨善、無知の横行する教育界（本間一誠）文化を支へる人々（吉田道明）文化を守る仕事（駒井鐵平）無駄と文化（下地正信）漢字と文化（駒井鐵平）土地と文化（伊勢崎康幸）名前と文化（駒井鐵平）文化を亡ぼすもの（川畑賢一）死者と文化（本間一誠）季節感と文化（下坂勝洋）傳統と文化（角山正之）市井の文化（富澤敏彦）文化繼承の實踐（太田正弘）文化繼承の一視點（土屋秀宇）學校は非文化地帶（三宅義藏）文化繼承と國語教科書（若井勲夫）非文化的愚論を排す（高橋裕子）文化なき歴史授業を排す（平田光寛）この頃氣になること（太田正弘）小著發刊に寄せて（平山寛司）「現代かなづかい」の幻想（前川孝志）國語國史の常識刊行に就て（駒井鐵平）幼兒に與へるべきもの（三宅義藏）不易なるべきものの決定（佐藤哲夫）吾が子が爲した漢詩百首暗誦（片岡正彦）大和魂・詩魂を求めて（中村敬司）「現代かなづかい」から假名遣へ假名遣論者の爲すべき事（上田博和）「日本國憲法」の假名遣（藤澤一雄）苦闘のヒント（伊波隆）正字を正字とすべし（大沼英太

郎）戰爭體驗のある社長へ（小川雅照）「舊漢字舊假名教育」を擁護する（越川四郎）國語と子ども（青木廣子）土俵際の正統表記（高崎一郎）漢字漢詩指導今見込（松村洋史）矛盾と杞憂と（中澤伸弘）老人の回顧（福田恆存全集刊行に寄す（落合欽吾）愛誦文章撰の刊行に就て（角山正之）毛筆が育てた文字への嚴肅な態度（土屋秀宇）悲願に向かつて早十二年（佐々木秀信）國語國字問題を考へる有志の會の活動に就て（高池勝彦）福田恆存全集の完結に當て（中尾昭人）普遍の眞實を語る文藝批評（福田恆存全集第一卷（根岸清文）理解といふ美德への疑ひを説く（福田恆存全集第二卷（小川雅照）物事を根本から考へる（福田恆存全集第三卷（平山寛司）「常識」、この強烈にして直ぐなるもの（福田恆存全集第四卷（萩野貞樹）「素朴な現實主義」の勝利（福田恆存全集第五卷（青木英祐）教へと感動と（福田恆存全集第六卷（太田稔）間らしい人間の生き方（福田恆存全集第七卷（川畑賢一）劇作家福田恆存・福田恆存全集第八卷へ最終卷（駒井鐵平）君民一體の國の本相（平成の御大典を以て（三浦信吾）卷物の學級日誌（竹内孝彦）言葉盡しの刊行に就て（大橋伊佐男）

荒魂之會來歴・續
平成三年五月二十六日（日）二訂版
編輯・發行
荒魂之會